

2025年度 入試問題

一 次

国 語

注意

- この冊子は24ページまであります。
- 問題は□から□までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 記述は解答欄内に収めてください。一行の欄に二行以上書いた場合は、無効とします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

— 1 —
次の文章は永井玲衣『水中の哲学者たち』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「途方もない質量がこわい」と言うひとがいた。友だちにサイコロ状のものを手渡され「これには宇宙と同じ質量が詰まっている」と言われた夢がトラウマだという。その場にいたひとたちはみんな笑った。だが彼は、あまりのこわさに号泣しながら目覚めたらしい。

親指と人差し指でつまんで持つことができてしまうほどの小さなサイコロ。その中には、途方もないエネルギーと物質がばつんばつんに詰まっている。それがなぜ存在しているのかはわからない。なぜ友人が持っているのかもわからない。そして、なぜ自分が手渡されようとしているのかも。^(a) フカカイなことばかりだ。

でもどうしてそれがこわいんですか、と聞いてみる。彼は「わからない、どうしてだろう」と黙ってしまった。

その話を聞いていて、わたしにも、理由はわからないがこわいものがあることを思い出した。それは「ひとがあっけなく死ぬ映画」である。わたしにとって最もこわいのは、ひとびとの恐怖を駆り立てるホラー映画などではなく、戦争映画やスパイ映画、ヒーローものなどのアクション映画で、「X」ひとが死ぬシーンだ。親友や愛するひとの死は重い。クライマックスで、劇的に描かれ、壮大な音楽がかかる。だが、最初に撃たれる登場人物Aは、主人公の巧みな銃さばきを紹介するためのシーンであっけなく命を落とし、二度と思ひ出されない。

登場人物Aには、名前がない。つけられていないからだ。性格も存在しない。設定されていないからだ。有名俳優でもない。誰でもできるからだ。だが、このひとには、生活が存在した。わたしたちが知り得ない、だがわたしたちと同じような生活の営みが。

^(*) M-1グランプリの霜降り明星の漫才を見て驚いた。決勝戦のネタで、ボケのせいやがプールで溺れ「頭の中に^(b) 走馬燈がかめぐる」と白目を剥く。「死にかけとるがな」とツツコミの粗品。ボケのせいやが走馬燈として、そのひとのさまざまな思い出

や人生を再現しはじめる。「マメでかー!」「関節鳴らへんなあ」「この道に出てくんねんな」。それを見たツツコミの粗品が「しょもない人生!」と叫ぶ。

どきりとした。だってこの人生は、まぎれもなくわたしたちの人生だったから。

お笑い芸人や、詩人、作家は、⁽¹⁾ 個人的で、普段は目に見えていない生活の営みの中の体験を言語化するのが本当に上手だ。わたしたちは信じられないほどばらばらなのに、なぜだか共有できている知覚や、記憶、体験がある。そんなものを彼らにふと掘り当てられたとき、哲学的な真理にたどり着いたような心持ちさえする。

便座は恐らく冷たいだろう／⁽ⁱ⁾ 又吉直樹

お笑い芸人でもあり、作家でもある又吉直樹の⁽ⁱⁱ⁾ 自由律俳句。ここには大きなエピソードや、心震える美はない。だが、誰もが覚えのあるような日常の断片がある。ここまで言語化されなくとも、ひんやりとした白の便座から、冷たさのイメージを受け取ったことがあるひとは多いのではないだろうか。

わたしたちは大いなる物語を求める。劇的で、印象的な出来事を、大切に覚えている。自分を語るときは、それぞれの人生ハイライトアルバムがあり、それを思い出しながら自分を紡いでいく。ハイライトアルバムがうまく作れていなかったり、思い出せなかったりするひとを「うすっぺらい人間」なんて呼んで揶揄することもある。

だが、わたしたちはこのような非常に具体的に忘れてしまうような、本当に小さな小さな出来事や感情や知覚でもできている。意識にのぼらない、しかし時にひとびとと共有しうる体験、そして忘れて、どうでもいいとされて、取るに足らないとされているもの。その無数のまたたきの粒で何とかわたしという輪郭を保っている。

^(※) フランツ・カフカは「なぜ人間は血の詰まったただの袋ではないのだろうか」と書いた。ただの袋だったらどんなに気が楽だら

う。そうではなく、人間は宇宙の質量が詰まったサイコロなのである。宇宙の中に数えきれず把握しきれないほどの星があるように、小さな小さなつぶつぶがあわさってできている。こんな小さな身体に、^②つぶつぶがぎゅうぎゅうに詰まって、おそろしい質量を持つている。

手渡されるサイコロは、わたしたちのことなのだ。

それを「いのち」と呼ぶひともいるだろう。いのちに詰まっている、無数の歴史、知覚の連なり、思考の広がり。アクションシーンで登場人物Aが死ぬシーンは、宇宙の質量が詰まったサイコロが、ただの血の詰まった袋であるかのように扱われるから、こわいのかもしれない。

よく哲学は、大きくて、ドラマチックで、抽象的な概念だけを取り扱うと思われている。生とか精神とか形相とか。すべてにピククリマークがつきそう。哲学の学会に行くと、ばんばんそんな言葉が飛び交って、花火を見ているような心持ちになる。もちろんこれはこれで意義があるし、面白いことも多い。でもそればかりだと、自分がどこにいたらいいかかわらなくて、ふと心細くなる。

学生時代のバイトでいやなことがあった帰り道、遠く遠く遠くの知らないまちで花火が上がっているのが、ビルの隙間からほんの少しだけ目に入ったときのことを思い出す。すごきれいで、圧倒的で、華やか。でもその花火は、わたしのものではない。わたしの手からすり抜けて、どこか知らないひとのために打ち上がっている。わたしは疲れた身体をひきずって、誰もいない暗い道をうつむき歩きながら、遠い花火の音を聞いている。

あるまちでの哲学対話にファシリテーター^(*)として呼ばれたときのこと。大学の偉い先生をゲストにした上で、哲学対話をするという会があった。当時のわたしは、ファシリテーションもそんなに慣れておらず、本来対等にひとびとと議論する場である哲学対話に、偉い先生が偉いままに混じっているという難しい状況に対応しきれないでいた。とはいえ対話をするはずなのだからと、専

門用語を使わないで、ひとびとと共有できる自分の言葉で話すルールなどを最初に話し、哲学対話をスタートさせた。問いだしから始めようと、口をひらきかけると、先生がわたしをさえぎり^③「世界の世界的性^(*)が」と言った。

大きく鮮やかな花火が打ち上がる。わたしにはこれを、ひとびととしあわせな気持ちで眺めたり、自分だったらどのように打ち上げようか考えたりするときも、もちろんある。だが、その日参加していたのは、先生のファンだと思われる男性以外のほとんどが、そのまちに昔から住むおばあさんや、おしゃべりが好きで来てくれた女性たちで、彼の言葉も、感覚も、そして問いすらも分かちあっている。どこか遠いところで、見えない花火が打ち上がっている。いや、まずはみんなで何について考えようか考えようと、その先生を見やるが、花火は止まらない。^(*)ラカン、^(*)ハイデガー、^(*)ヴァイトゲンシュタイン。地平、世界、様相、現象。えらいひとの名や、大きく抽象的な概念、専門用語もほとんど乱発される。対話はブレーキがかかないまま、どんどん前に進んでしまう。先生のファンだという男性が、あとを追うように花火を盛大に打ち上げる。特定のひとにしか見えない花火を。

とうとう最後まで、そのまちに住んでいるひとたちが話す機会は与えられなかった。何度か介入し、ルールを確認して、ひとびとと共有できるテーマを設定しようとしても、火薬の匂いにむせかえりそうになるほど、先生たちは花火を打ち上げつづけた。そしてわたしにも、最後までその花火は見えることはなかった。

会が終わり、先生たちの⁽ⁱⁱⁱ⁾コンシン会^(*)に向かう途中の道でひとり呆然^{ぼうぜん}していると、参加者のおばあさんが近づいてきた。そのひとは、以前何回か哲学対話をしたが、直接話したことはなかった。彼女はぼうつとしていてわたしの手をとって、自分の孫のように自分の手とつないで、坂の途中に木が植わっている場所にわたしを連れていった。風が熱い頬^{ほお}にあたる。ベビーカーを押した女のひととすれ違う。ごとごとと音をたてて、車がゆつくりと通り過ぎる。歩道をとおり、その脇にひっそりと佇む切り株^{たなず}が目に入る。おばあさんは立ち止まり、うつむいたまま話し出す。

ここには、わたしの好きな木があったのよ。いつもお家の前を掃除するとね、この大きな木が目に入って、あいさつをして。

昔からある木だね。でも、あるとき、しらないひとたちがきて、許可もなくこの木を切っちゃったの。かなしかった。ほら、切り株になっちゃっているでしょ。

わたしにもお気に入りの木や草がある。何かの^(c)拍子にそれがなくなることもある。切られちゃったな、かなしいな、と歩きながら思う。ささやかな、手のひらサイズの、日常の断片だ。ただ一般的な人生の

Y

にはたぶん載らない。わたしのあまりにささやかな日常の揺れ動きだから。でも、わたしはそのかなしみを知っている。

高いところにいるひとたちの話はぜんぜんわからないけど、この木のお話は、あなたに聞いてほしかった。くだらないこと言っでごめんね。

おばあさんはそう言って両手でわたしの手を握った。いえ、さっきの対話にあったどんな発言よりも価値のあることです、わたしは涙をこらえて言った。生まれてはじめてひとにやさしくされた気がした。

好きな木が切られて、かなしかった。ここからでも、哲学は始めることができる。だから、哲学対話ではそんな日常の断片が飛び交う。「哲学」なんてかっこいい名前なのに、「小学校のときの給食の味噌汁に入っている、ちよつと煮込まれすぎてどろつとなつたわかめ」なんてものが主題になったりもする。普段の意識にのぼらず、どうでもいいとされて、議論のテーマにもならず、取るに足らないとされているもの。そんなことについても、考えることがゆるされる。あのときは、細かな断片だけど、なぜか共有できているどろどろのわかめを思い出してみんな笑った。そう、そのときの哲学対話は「不気味」というテーマだったのだ。世間はハロウィンで、これももうずっと前のことだ。

哲学はすべてのひとに関係する。すべてのことにかかわることができる。重要でないと思われているものも、哲学対話では考えることができる。むしろ、普段は忘れられているようなものや、問われもしないようなことに耳を澄ませる。そしてまた同時に、議論の場で取るに足らないとされ、話を聞かなくてもいいとみなされているひとの話にも耳を澄ませる。人間を、ただの血の詰まった袋ではなく、宇宙の質量を持つサイコロとして扱う。ともに知を愛するために、本当の意味とともに哲学をするために。夢を見た彼はサイコロを渡されるのがこわいと言った。いまなら少しわかるような気がする。哲学対話では、誰かが考えを話すとき、まるでそのひとが、自分自身の一部をわたしに手渡してきたかのように思えるときがある。その考えは、そのひとなのである。

⑤ だからこそわたしたちはおそれるだろう。手渡されたサイコロを手から滑らせて落としてしまうことを。映画であっけなく殺されるような仕方、誰かの考えを扱うことを。誰かが手渡してきたその考えは、ただの音ではない。それは声として聞かれる。宇宙の質量をもったいのちとして聞き取られる。

「いのちはかけがえがなく愛おしい」と言いたいわけではない。むしろ満員電車などでひとびとと身を寄せあうとき、誰のことも愛おしくないと思う。だが、誰のことも排除したくないと思う。傷つけない。あなたを壊してしまうこと、あなたを損ねてしまうことがこわい。でもやっぱりそれはなぜだかわからない。

《注》

*1 M-1グランプリ……二〇〇一年に創設された、若手漫才師を対象とした漫才賞レース。「霜降り明星」は二〇一八年の優勝コンビである。

*2 フランツ・カフカ……チェコの作家（一八八三―一九二四）。

*3 ファシリテーター……進行役のこと。

*4 ラカン……フランスの精神病理学者（一九〇一～一九八一）。

*5 ハイデガー……ドイツの哲学者（一八八九～一九七六）。

*6 ヴィトゲンシュタイン……オーストリア生まれで、イギリスの哲学者（一八八九～一九五二）。

問一 〓部（a）（c）のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 〓部（i）「又吉直樹」は芥川賞受賞作家である。以下に引用するのは彼の受賞会見での言葉であるが、にはある作家の名字が共通して入る。その作家を選びなさい。

僕が小説を読み始めたのが芥川（龍之介）とからです。は芥川賞を取れなくて、川端康成に手紙を書いたと聞きますね。いつもテレビで「が好き」と勝手に言っ、それがたまに申し訳ない気持ちになって。テレビで勝手に言った時は三鷹のお墓参りをするようにしている。今月はもう2、3回行きました。

（「時事ドットコムニュース」より引用）

ア 菊池寛 イ 宮澤賢治 ウ 三島由紀夫 エ 志賀直哉 オ 太宰治

問三 〓部（ii）「自由律俳句」とあるが、これに当てはまらないものを選びなさい。

ア かごからほたる一つ一つを星にする（荻原井泉水）

イ 納豆の糸引張て遊びけり（小林一茶）

ウ ふるさとの水をのみ水をあび（種田山頭火）

エ 入れものが無い両手で受ける（尾崎放哉）

オ 色々の人々のうちにきえてゆくわたくし（成田三樹夫）

問四 〓部（iii）「コンシン」とあるが、〓部が「コン」「シン」と同じ漢字のものを選びなさい。なお、「コン」「シン」の順番になるように記すこと。

ア ころから君に伝えたい

イ 三つ子のたましい百まで

ウ あたかいかおもてなしに感謝しています

エ 孝行のしたい時分におやはなし

オ あたらしいお札にも慣れた

カ 隣の一家とはねんごろにしている

キ まことにありがとうございます

ク みの上話を先生に聞いてもらった

問五

X

に入る言葉として最も適当なものを選びなさい。

- ア 音もたてずに
- イ 血を流して
- ウ まぎれもなく
- エ 悪役にされた
- オ 場の流れるに

問六

——部①「個人的で、普段は目に見えていない生活の営みの中の体験」とあるが、「普段は目に見えていない」のはなぜだと考えられるか。その説明として最も適当なものを選びなさい。

- ア 人間は他人に笑われたくないという本能を持っており、自分を立派に見せられる物語を作り上げるのに必要なことばかりが、自然に記憶されるから。
- イ 人間は、日ごろは目に見える理解しやすいものばかりに注目してしまっているため、姿形を持たない哲学的な真理にたどり着くことは非常に困難であるから。
- ウ 一流の芸人や作家とは違って、普通の人間は、体験を言語化することに慣れていないため、ちょっとした体験などは忘れてしまうのが常だから。
- エ 人間がばらばらに生きる現代では、互いを思いやるあたたかい気持ちは失われがちであり、相手の人生において生じている多くのことが無視されるから。

問七

——部②「つぶつぶがぎゅうぎゅうに詰まって、おそろしい質量を持っている」とあるが、これは人間がどのような存在であることをたとえたものか。その説明として最も適当なものを選びなさい。

- ア 他人から見取るに足りないものでも、当人にとってはかけがえない出来事を無数に集めてできた、強固な自意識を持つ存在。
- イ 当人の記憶をはるかに超える無数の取るに足りない出来事や無数の感情や知覚によって成り立つ、全容をはかり知れない存在。
- ウ 普段はばらばらに生活しているものの、無数の人々と一つの思いを共有することできる、一つの巨大な存在の一部としての存在。
- エ 意識することさえできない、印象に残らない出来事を何度も経験して、人生の卑小さに気づきながらも、それに抵抗し続ける存在。
- オ 宇宙と比較すればサイコロのような小さな存在でありながら、多くの人々と共生することによって、重大な存在意義を得た存在。

問八——部③「『世界の世界性』」は、原文でも異なる字体で強調されている言葉である。筆者はこの工夫によって何を強調しようとしたと考えられるか。その説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 花火にもたとえられるような華麗な哲学用語を使って世界を説明できることは、先生のような哲学者にとって非常に誇らしいことなのだという。

イ 先生の専門用語が筆者にはなじみのないもので理解できなかったことによって、進行役として力不足であると感じ、筆者が困り果ててしまったこと。

ウ 先生の切り出した話題が多く参加者には全くついていけないものであったことが、哲学対話の進行役である筆者の期待を裏切り、筆者をあせんとさせたこと。

エ 「世界が」と言えば済むことを「世界の世界性」と言ってしまう先生のような哲学の専門家に対して、筆者が常日ごろから大いにいらだっていること。

オ 先生は対等にひとびとと議論するために哲学対話に参加したのではなく、自分のファンを喜ばせるためだけに来た、非常に利己的な人間であったこと。

問九

Y

に入る九字の言葉を本文中から探し、答えなさい。

問十——部⑤「だからこそわたしたちはおそれるだろう。手渡されたサイコロを手から滑らせて落してしまうことを」とあるが、「手渡されたサイコロを手から滑らせて落してしまうことを」「おそれる」とは、どういうことか。説明しなさい。

問十一 この文章の特徴を説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 花火という言葉からくる空を見上げるイメージと、切り株という言葉からくる地面を見るイメージとの対比が、専門家と筆者との違いをも表現している。

イ 筆者は身近なことも哲学的思考につながると主張しており、実際に漫才や給食など、日ごろは哲学用語に縁のない人にも通用する例が多用されている。

ウ 印象的に「！」を用いるなど、批判を恐れない断定的な表現によって、哲学は一般的な言葉でこそ語られるべきだという主張が強く伝わってくる。

エ フランツ・カフカの言葉を根拠にして、日常の断片のようなものであっても、哲学のテーマに接続し、対話を深めることができることを伝えている。

オ おばあさんの話した内容がそのまま引用され、筆者の感動が率直に書かれていることで、誰もが尊い存在だということこの文章の主題が強調されている。

二

次の文章は、安岡章太郎「球の行方」の一部である。日本人の「私」は、数え年で十歳のころに、日本が朝鮮半島を植民地化していた時代の朝鮮から、青森県の弘前市に移り住んだ。以下はそれに続く場面である。これを読んで後の問いに答えなさい。

一と口について、東北の町は暗く閉ざされて、人の暮らしは貧しげであった。言葉がつうじないといっても、国語の時間(＊)に読本を標準語でよめるのは組で私一人だったから、自分だけがまわりの子供とちがう言葉でしゃべっていても恥ずかしいとか、(一) おくれするとかいうことはなかった……。恥ずかしいといえば、初めて弘前の学校へ行った日、隣の子供が、こちらの筆箱を覗きこんでセルロイドの軸のシャープペンシルを不思議そうに眺めているので、シンを出して帳面(ちやうめん)の上に書いてみせてやった。気がつくと前後左右の子供がみんなこちらを振り向いている。先生が教壇から下りてきた。いきなりシャープペンシルを取り上げると、皆には何もいわず、私の顔を正面から見て、

「こういうものは、もう学校へ持ってこないように」

といった。とたんに私は言いようのない恥ずかしさを覚えた。赤と青の色鉛筆のシンが両端から出るシャープペンシルは、朝鮮では学校の近所の文房具屋でも売っていて値段もそんなに高くはなかった。そんなものが皆にこれほど珍しがられるとは、私は思ってもいなかったのだが、いま先生に注意されると、いかにも自分がツマらないものを学校へ見せびらかしに持ってきたように受け取られた気がして、くやしさととも恥ずかしさともつかない気持(きもち)で、顔が真っ赤になってしまった。

ことによれば私は、そのとき ① 自分自身がその安もののシャープペンシルに見立てられているような心持が何処か (こころもちどこ) でしていた。そういうものが、先生の視線からも、まわり中の子供の眼つきからも何となく感じられた。

何はともあれ、弘前の学校では私は大事がられる子供の人になっていた。これまで私は学芸会にも出たことがなかったのに、ここでは講堂で一人で本の朗読(ろうどく)をさせられた。それは、れいの得意の標準語のせいだからまあわかつとして、二学期の終り(おわり)にわた

された通信簿(ほ)に、絶対に苦手であるはずの体操(たいそう)までが「甲」(＊) になっていたのには、私は子供ごろに ② くすぐたい (くすぐたい) するような不安を覚えた。しばらくたって、東京の叔母(おば)から私に、野球のグローブとバットが送られてきた。いっしょに添えた手紙に、

「成績優秀のごほうびに、叔母より」

とあった。母が、私の通信簿のことを親戚(しんせき)中に手紙でしらせたために違いない。私もまた、叔母からほうびを贈られると、いかにも自分が優等生になったという気分が湧(わ)いてきた。

(中略)

いつか学校の帰りに、弘前高校(弘前) (旧制) のそばを通りかかると、グラウンドで威勢のいい声がきこえ、弘高生が二手に分れて練習試合をやっていた。

「おい、三上(＊)うじ、ちょっと」「ぶく (ぶく) させてくれ。 (ぶく) こう暑く (さむ) っちゃやり切れない」

頬ヒゲをはやした投手が、何となく気取ってきこえる標準語で、そう呼ばわりながらベンチに戻ると、ひしゃくで新しいバケツの水をぐくぐく飲んだ。バケツの中には大きな氷のかたまりとレモンの輪切りが無造作にぶちこんであり、それがかえって贅沢(ぜいたく)でハイカラな感じがした。(＊)

「ああ、ぼくたちも野球がやりたいな」

私は、明るい日射しを浴びた銀色のブリキのバケツの中で、ぶかぶか浮いているレモンやきらきら光る氷を眺めて、何げなしにつぶやいた。すると隣の子が、

「ンだ、やるべす」

と、重おもしろい口調でこたえたのに、私は驚くよりもガッカリしたような心持だった。

「なんだ、君も野球をやるのか」

「やるべす」

そのFという子は、⁽ⁱⁱ⁾むっつりした口調で繰り返した。こんどはひどく自信ありげに響いた。

「ほんとにやるんだな。何処でやる？」

「K社のうら」

「よし。それじゃ家へ帰ったら、すぐにK社のうらへ行くから、君も行って待っていてくれ」

私は、家で学校の荷物をほうり出すと、忘れるともなく長い間しまってあったバットとグローブを探して、持ち出した。家を出ようとすると、母に呼びとめられた。

「何処へ行くの」

「K社のうら」

「大丈夫なの、そんなものを持って行って。またいつかのシャープのときのように、先生にみつかると思われんじやないの」

「大丈夫だったら、野球をやるんだから」

私はイライラしながら、母にそれだけ言うと、家を飛び出した。しばらく手にしなかったグローブは、皮が固くなって、表面に白い粉がうすく溜^{たま}っていた。^③私は、それを手で揉^もんだり、服のうらでこすったりしながら、道を急いだ。……家からK社までは、そんなに遠くはない。しかし私は、少しでも早く行きつかないことには、すぐにも日が暮れてしまいそうで、気が気でなかった。ところで、目指すK社の裏手の広場まできて、私は一瞬、ドキリとした。ふだんは何もない草原なのに、そこにはすでに年上らしい者も交えて十五、六人もの子供が^{あつま}集っており、ネットを張った二本の棒^{ぼう}杵^きまで立てて、さかんにバットを振りまわしたり、球を投げ合ったりしている。

なんだ、ぼくたちのまえに、もう先客がきてるじゃないか――。

つぶやきながら私は、Fがきたらまた何処か他の場所をさがしに出直すつもりで、それまで草原の片隅で待つことにした。だが、その必要はなかった。Fは、もうその年上の連中をまじえた仲間に入って、いっしょにスポンジのボールを^(a)スデで^{つか}掴もうと追いかけていた。それを見て私は急に、^④眼の前のものが白けて遠のくような気がした。

Fの奴、最初からここにいる連中と野球の試合をやるつもりでいたんだろうか、それならそうとなぜハッキリと、さつきぼくにそう言わなかったんだ――？

そう思った瞬間、私は^(b)生^{なま}れて初めて裏庭でスキーをはいて転んだときのショックを^(c)憶^{おも}い出していた。じつのところ私は、Fがこんなに野球がうまいとは、いまのいままで知らなかったし、弘前にこんなに^(d)大勢^{おおぜい}野球をやる子がいるとは、もつと意外だった。私の考えでは、野球というのはもつと高級なハイカラな競技であり、弘前などではさっきの旧制高校生のように全国的に学生の集まる学校など特別なところで、英語や標準語の会話をかわしながら^(e)娯^{たの}しむものかと思っていた。だから私は、ここへくるまでFと二人でキャッチ・ボールでもするか、せいぜいあと一人か二人の子供を仲間に入れて三角ベースでもするつもりでいたのだ……。それが、まったくの見当違いだということは、さつき私が野球をやらなかつたとき、Fが「んだ、やるべす」と、自信に^(f)充^みちた声でこたえたのをきいただけで、もう気がついてよかったはずなのに、私はあくまでも野球を都会的なスポーツで田舎の子のやるものではない、とここへきてみるまで、一人合点に信じこんでいたのだ。そういう私自身、立派なグローブとバットだけは^(g)貰^{もら}ったものの、まだそれを使って飛んでくる球を、どうやって掴まえ、どうやって打っていいのかもわからない……。こんなことになるぐらいなら、母に言われたとおり、家に残って一人で本でも読んでいればよかった。

しかし、いまさらもう何を言っても、引っこみはつかない。Fがこっちに向^(h)つて、さかんに手を上げて振っているのは、私にも早く仲間に加われということだろう。仕方がない、私は言われたとおりに彼等の中へ入って行かなければならない。

しかし私の考えは、まだ甘つちよかった。Fが私を手招きしたのは何も直ぐに私を仲間に入れてくれようというのではなかった。そのまえに、まず私の実力をどの程度のものかためそうというのであった。

「こつらさ、あべ（こちらへあゆめ）」

と、Fは私を外野の方へ引っぱって行った。私はいくらか、ほっとした。外野なら、めったに球は飛んでこないから、ぼくにだつてつとまらないものでもないだろう。もし球が飛んできてこわかったら、グローブの先きで掴まえそこなう振りをして球をよければいい。スキーだって何とか一人でやっているうちに、どうやら滑れるようにはなったのだから、野球だってどうにかならないわけではないだろう……。だが、野球はスキーとちがって、うまくなるまで一人でやるといふわけには行かなかった。いくら外野がひろくまわりがあいているといつても、裏庭で一人でスキーをはいて立つては転び、転んでは立つうちに、だんだん滑れるようになるという具合には、ことは運ばなかった。ノックの球が飛んでくるたびに、私はグローブの手を延ばして掴みそこなう振りをするどころか、そのまえに眼をつむって、^(b)足許の地べたに自分の体ごと転がってしまうのだ。

せめて球が自分の前に落ちてくるまでは、眼だけはパッチリあけていよう――。

そう思つて私は身構えるのだが、いざ球がプスンという音を立ててうなりながら自分の方へ近づいてくると、その瞬間に、もう私は頭を地べたに向けて俯き、両手を高く上げて、あらぬ方へうつ伏している。それは一人でスキーをはいて転んでいることに較べて、ひどく孤独な想いがした。そして三度、四度と、それを繰り返すうちに、⁽⁵⁾私はもはやグローブを手にはめていることが耐えられないほど恥ずかしくなつた。

一人で部屋の中にいるとき、あんなにもシックリ私の手になじみ、何でも掴まえられそうだったグローブが、いま皆のみているところだと、どうしてか私の手を固く縛り上げ、球を掴まえるどころか、私の体を転がすことにしか役立たない。

「おい、Fくん。このグローブ、貸すから使えよ、ぼくはしばらくここで休んでみているから」

Fは、むつつりした顔で私のグローブを受けとった。手にはめて、二、三度、右手でばんぽんと叩くと、小首をかしげて、どう

いうわけか、そのグローブを私の知らない年上の男の子に渡してしまつた。私は、そんなことはして貰いたくはなかつたが、いまさらFのすることに止め立てのしようもなかつた。どうせバットの方は、さつきから知らないよその子が使っている。グローブだつて誰が使つたつて、そう減るもんじやないし、かまやしない――。

私は、一人になつて草原に腰を下ろすと、かえつてホッとした気分で、そうつぶやいた。（中略）と、そのときだった。私は突然、身のすくむような想いで飛び上つた。向うから白いパラソルを差した女の姿が、こちらへ近づいてくるのだ。

どうしよう。

私は、母がパラソルのかげからちらりとこちらに投げかけた視線を感じると、その瞬間、グローブもバットも取りあげられたまま一人ぼっちで放り出されている自分自身の姿が、どうしようもないほど見つともなく、恰好のつかない哀れなものに思われた。そして不意に隠れるように、近くにあつた松の木に飛びついて、てっぺん目がけて上りはじめた。

――いったい何のつもりで、こんなことをしているんだろう、どうせぼくの情ない姿はもうお母さんの眼にとまっているにきまつているし、松の木になんかに上つたつて隠れられるものじゃない。

しかし、そう思うものの私は、自分がいま何もすることがない以上、木にでも上つて見せずにはいられなかつた。草原なんかにはボンヤリ腰を下ろしているよりは、木上りでもしている方が、いくらかでも子供らしく、愉しそうに見えるだろう……。しかし、もともとそんなに高くもない松の木は、私が上りはじめると、たちまちてっぺんの近くまでできてしまつた。そして母は、もう私が枝に足をかけている木の直ぐ下まできて、眼を上げてジッと息子のすることを見詰めている。私は、いたたまれず眼をあらぬ方にそらした。すると、⁽⁶⁾Fやその仲間の私の知らない外の世界の子供たちが、球の行方を追つて右往左往している姿が、松の梢ごしに信じられないくらい小さく遠のいてチラチラと眼にうつつた。

《注》

- * 1 読本……国語の教科書。
- * 2 セルロイド……当時使われていたプラスチックの素材。
- * 3 体操……いまでいう体育の教科。
- * 4 甲……通知表の成績評価を示す記号。かつては、成績が良い順に「甲」、「乙」、「丙^{へい}」などの記号が用いられていた。
- * 5 弘前高校（旧制）……旧制とは、旧制高校ということ。旧制高校は、明治から一九五〇年まで続いた高等学校の形態。
- * 6 三上うじ……弘高生のうちの一人の呼び方。
- * 7 ハイカラ……ものが、西洋風で目新しいこと。また、そうした西洋風や都会風を気取ったり、追求したりするさま。
また、その人。
- * 8 生れて（…）憶い出していた……「私」は、弘前に来てから初めてスキーを経験した。はじめはうまく出来ず転んでいた。

問一 Ⅱ部（a）、（b）のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 めろ部（i）、（ii）の本文中での意味として最も適当なものを選びなさい。

（i）「気おくれする」

- ア 自信を失う
- イ 後悔する
- ウ 申し訳なく思う
- エ 悲しみに暮れる
- オ おじけづく

（ii）「むつつりした」

- ア 腹を立てた
- イ 愛想がない
- ウ 堂々とした
- エ さりげない
- オ 意地が悪そうな

問三 ……部(X)「一ふく」とあるが、次の選択肢の——部の言葉が、この「ぶく」と同じ漢字、同じ意味で用いられているものを一つ選びなさい。

- ア 薬をふく用する
- イ 一ふくの掛け軸
- ウ 敵国に降ふくする
- エ 船が転ぶくする
- オ 幸ふくを追求する

問四 ——部①「自分自身がその安もののシャープペンシルに見立てられているような心持」とあるが、どういう気持ちか。説明しなさい。

問五 ——部②「くすぐったいような不安」とあるが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを選びなさい。

ア 得意科目だけでなく苦手な体操も良い成績になっているため、不正が行われているのではと学校に不信感を抱いている。
イ 自分が成績優秀なのはうれしいと思う一方で、まわりの子からねたみをもってしまいかもしれないと心配になっている。
ウ 学校で、あまりにも自分が大事にされすぎていると感じるため、うれしくもあり恥ずかしくもある気持ちになっている。
エ 学校の評価は高かったとはいえ、このまま練習をしないしていると体操の力がつかないのではないかと思って悩んでいる。
オ 苦手な体操までが良い成績だったため、うれしい気持ちもあるが、本当は自分には実力がないことが気になっている。

問六 ——部③「私は、それを手で揉んだり、服のうらでこすったりしながら、道を急いだ」とあるが、この時の「私」の気持ちとして最も適当なものを選びなさい。

ア 新品のグローブだと馬鹿にされるので、普段使っているもののようにみせかけることに気が取られて早歩きになっている。
イ 出がけに母親にシャープペンシルで注意されたことを思い出させられたので、いらだつ気持ちをグローブにぶつけている。
ウ 優越感の象徴であるグローブを使うのが楽しみで気がせいっており、道を急ぎつつグローブを使いやすくしようとしている。
エ 夕暮れが近く、早くしないと日が暮れてしまって怖いので、グローブを触り、気を紛らせながら急いで行こうとしている。
オ 友達との野球が楽しみなのに、早く行かないとあまり遊べなくなるので、歩きつつグローブの手入れをしようとしている。

問七 ——部④「眼の前のものが白けて遠のくような気がした」とあるが、そのような気がしたのはなぜか。理由を説明しなさい。

問八 ——部⑤「私はもはやグローブを手にはめていることが耐えられないほど恥ずかしくなった」とあるが、なぜそのような気持ちになったのか。その理由を本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問九 ――部⑥「Fやその仲間の私の知らない外の世界の子供たちが、球の行方を追って右往左往している姿が、松の梢ごしに信じられないくらい小さく遠のいてチラチラと眼にうつった」とあるが、このときの「私」の気持ちを、本文全体の内容をふまえて解釈したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 何でも周囲より優れている「私」は、Fたちに対しても田舎の子どもであると下に見ていたところがあったが、野球ではまったく歯が立たなかったため、悔しくて腹を立て、もう仲良くするのはやめようと決心している。

イ 田舎に転校してきた「私」は、標準語が話せるなどFたちよりも優れているため、一目置かれていると思っていたのに、野球ができなかったというだけでFたちから仲間外れにされてしまつて、悲しくて落ちこんでいる。

ウ それまで自分を自慢の息子だと思つてくれていた母親に、みつともない姿を見せたくないあまり木に登つてしまつたうえに、Fたちに声をかけることもできず、ただ眺めることしかできない自分を情けないと思つている。

エ 都市部のスポーツだと思つていた野球を上手にプレーするFたちの意外な一面に触れ、Fたちと距離を感じると同時に、特別扱いをされていた自分の情けない姿をさらして自信を失い、孤独を感じてぼうぜんとしている。

オ スキーも練習してできるようになった「私」は、本格的な野球においても弘前の子供たちよりも優秀だろうと思ひ込んでいたのに、まったくできなくて自信を失い、野球をしろと言つたことを今さらだが後悔している。

問十 本文の作者である安岡章太郎は、戦後日本の「純文学」というジャンルを代表する作家の一人である。日本に限らず世界の文学には様々なジャンルが存在する。そうした文学のジャンルの〈説明〉(1～4)のそれぞれで説明されている〈作家とその作品〉として適当なものを、ア～コから選びなさい。

〈説明〉

- 1 明治時代になると、子どものための「児童文学」が書かれるようになり、児童文学の雑誌『赤い鳥』が刊行され、この作品も掲載された。
- 2 日本は古来より「随筆」というジャンルが盛んに書かれており、この作品は『方丈記』、『徒然草』と並んで三大随筆と呼ばれる。
- 3 近年、女性の問題や姿を描く作品・作家が世界的に注目され、この女性作家も二〇二四年にノーベル文学賞を受賞して話題となった。
- 4 演劇の脚本にあたる「戯曲」も数多くの名作が書かれている。特にこの作家の戯曲は人生の悲劇や生き方を描き、世界的に読まれている。

〈作家とその作品〉

- | | |
|------------------|-------------------------|
| ア 新美南吉『ごんぎつね』 | イ シェイクスピア『ハムレット』 |
| ウ 夏目漱石『こころ』 | エ 紫式部『源氏物語』 |
| オ ハン・ガン『菜食主義者』 | カ 清少納言『枕草子』 |
| キ あさのあつこ『バッテリー』 | ク 松尾芭蕉『おくのほそ道』 |
| ケ 小川洋子『博士の愛した数式』 | コ マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』 |



25J110

↓ここにシールを貼ってください↓

※欄には記入しないこと。

受験番号			
氏		名	

合計得点
※

一

問一

a

b

c

問二

問三

問四

コン

シン

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

二

問一

a

b

問二

i

ii

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

1

2

3

4

※

※

※

※